

目的 幾何学的図形は錯視現象に大きくかかわるが、それは被服の図柄においては着用したとき、その「見え」やイメージに影響を与える。前報に引き続き、今回2色配色における縞柄の色彩変化について、SD法によりイメージ計量を行い、因子分析による解析を試みた。その結果ある程度説明できる結果を得たので報告する。

方法 縞柄(白黒)の「太縞」と「中太縞」の「縦」、 「横」のベーシックなワンピースを制作、普通体型のモデルに着用させた。配色は日本色研配色体系P.C.C.S.の201色の中から有彩色12色を選び基本色とした。この12色における46種類の配色の組合せを考え、各々の縞柄パターン4種類について計184の配色を考察した。なお、刺激はカラーシミュレーション装置(日本色研事業676RC)で色変換し、被服学科の女子大生180名を被験者とし調査を行った。また、SD法に用いた尺度は15尺度で各々7段階とした。

結果 色については暖色と暖色の組合せは「明るい」「太った」「温かい」のイメージ、寒色と寒色の組合せおよび寒色と中性色との組合せは「暗い」「やせた」「冷たい」のイメージが示された。また、暖色と寒色との組合せに「快」「繊細な」「都会的」イメージが目についた。色においては暖色、寒色、中性色との各々の組合せにおいて温度感(暖寒感)のイメージの関連がみられた。太さにおいては縞が太い程「はっきり」「強い」のイメージが得られたが、方向については強いイメージがみられなかった。